

歴史から学ばぬ者は未来がない

山口 秀 樹
(宮崎みどり製薬株式会社)
代表取締役社長



昭和33年3月19日、廣崎可也が創業した九州産業株式会社を起点として、現在の宮崎みどり製薬株式会社があります。九州産業株式会社は宮崎県助成産業として国有林内未利用資源活用を目的とし、九州で初めて宮崎市に木材チップ工場を設置し、日本パルプ株式会社（現王子製紙株式会社）日南工場に広葉樹木質チップを納入しました。国有林内未利用資源とは建築資材にならない低質材、即ち広葉樹です。木材チップの生産過程で産出される広葉樹皮は当初樹皮堆肥として処理され、その後炭化事業へ進化発展し、それに伴い熱化学部が設立されました。広葉樹皮は炭化工程で固形物の炭と、炭化した広葉樹皮から出る煙を冷却方法で回収した木酢液に分離されます。昭和45年4月、熱化学部を分離独立させ設立した廣崎総業有限会社の炭化事業は、畜産業界に進出し「ネッカリッチ」の商品名で幅広く畜産業界に普及していきました。昭和49年6月5日、廣崎総業有限会社を解散させ、同日廣崎総業株式会社を設立しました。昭和51年6月「動物用医薬品」製造販売許可を取得し、廣崎総業株式会社から廣崎製薬株式会社へ社名変更しました。木酢液を精製木酢液として清涼飲料水で販売していましたが、昭和52年10月薬事法違反の嫌疑で立ち入り調査があり、全事業に悪影響が波及し崩壊状態になりました。

昭和52年12月、2代目岩切好和社長は「動物用医薬品」製造販売許可を保持する為、廣崎製薬株式会社から現在の宮崎みどり製薬株式会社へ社名変更し再建に当たる事になりました。昭和56年「混合飼料」製造業届、昭和60年「特殊肥料」製造業届を完了しました。昭和62年10月、宮崎みどり製薬株式会社の開発した資材の評価を、生産者・小売業が三位一体となり消費者に問う業務を目的として、大阪市に株式会社がんこ村（現ネッカリッチ株式会社）を設立しました。宮崎みどり製薬株式会社の「イノベーション」部門を担当します。平成元年、宮崎みどり製薬株式会社の事業推進を阻害する自然災害等の危険分散を目的として、鳥根県仁多町（現奥出雲町）に中国みどり活性株式会社を設立しました。業務は順調に再建され、アメリカ・フランス・南アフリカ・台湾等の海外輸出も順調に拡大しています。平成時代になると円高の影響で輸入チップが増加し、チップ業界の経営は困難になり業種転換を求められました。九州産業株式会社はバイオマス変換技術を活用し広葉樹木質チップの新たな需要を開拓すべく農林水産省の指導のもと助成事業・補助事業を平成5年より開始し、その後も数々の委託事業を受けました。平成12年、林野庁より杉材の新たな需要開発として木質系粗飼料実用化実証事業を受けました。

当初の目的以上の成果が立証され、平成13年農林水産大臣へ宮崎県知事経由で「飼料製造業届」が完了し、国産初粗飼料事業を開始しました。平成16年4月九州産業株式会社と宮崎みどり製菓株式会社は合併し宮崎みどり製菓株式会社を存続会社として研究開発型企業として進化させました。

私は平成20年5月創業家外から3代目社長として就任しました。平成13年杉粗飼料事業を開始し10年間の企業努力で平成22年3月初めて単月度黒字が計上出来ましたが、平成22年4月宮崎で発生した口蹄疫により杉粗飼料事業が一時中断しました。平成22年8月27日終息宣言後、杉粗飼料事業を再開しましたが、円高で海外からの粗飼料価格競争に太刀打ちできませんでした。然しながら平成27年、福音が聞こえてきました。キュウリ生産農家からの問い合わせで、土壌中の有機物補充に輸入ヤシガラ繊維を使う予定だけど、杉粗飼料が使用できないかとの問い合わせでした。牛の第1胃中の微生物の働きと土壌中の微生物の働きは同じと言われていました。牛のエネルギー源は草である事から、当然土壌中の有機物補充に有効であると答えましたが、養牛に対応する勉強を研鑽し、事業を構築してきた私にとって基本的な応用常識が欠落してました。「灯台下暗し」です。即、研究開発部・営業部を総動員し、杉粗飼料が土壌環境に及ぼす影響の調査を実施しました。土性調査は、国際土壌学会法に基づき土性を12区分する土性三角表作成技術を取得し、土壌は「固相」「液相」「気相」で構成され、理想構成比は4:3:3と言われています。ここまでは各大学農学部で学びますが、土壌三相の土壌調査は各大学工学部建築科及び土木科が、構築物設置に対する基礎工事の為に地耐力試験の名目で実施します。土壌調査で明らかにされたのは農耕地土壌三相の「気相」不足でした。即ち酸素不足です。全国の耕作地を調査しましたが、ほぼ酸素欠乏症でした。地球温暖化の影響による天候不順と炭酸同化作用の不足と重なり、土壌の酸素欠乏症が一層農家経営を圧迫し、離農を促進し食糧の自給率を低下させる原因となっています。杉を原料として開発した養牛用の粗飼料が土壌の酸素欠乏症を改善し、食糧の自給率を向上させる事が出来るとは当初予想もしていませんでした。

昭和49年4月入社以来50年が経過しました。工学部出身の私は製品の分析等に携わる部門でしたが、製品の需要先は一次産業の畜産分野でした。営業関係者は全員木材部門出身関係者で社内で畜産分野に精通した者は皆無でした。その為、分析部門担当から営業部門に配置願を提出し、畜産農家の手伝いをしながら現場で指導を受け勉強に励み、その合間に宮崎大学農学部の先生から指導を受けました。既成概念が無い工学部出身者である事で全てに興味をそそられ、社内においては研究開発部・営業部・製造部を総括し、社外では営農で利益を出す為のポイントを事細かく聞く事が出来、この事は役員としてその後の企業進化に大いに役立ちました。現場で得たネッカリッチの実績を検討考察する事で、ネッカリッチを構成する「広葉樹皮炭」と「木酢液」の効能を見出す事が出来、その効能が直接営農利益に影響及ぼしている事を見出す事が出来ました。営農利益は農産物の機能性を消費者が認めて持続可能となります。農学部出身と工学部出身での物事に対する関心度及び観点の違いを強く認識しました。地球温暖化の影響による天候不順のなか、木材・木材成分を利活用した循環型有機農業は食糧の自給を向上させる事を可能にします。50年の年月を要しましたが、工学部出身で異分野の人間が木材の未知の世界に挑み、新たな需要分野を開発し、地球温暖化の原因の一つと言われている二酸化炭素の軽減方法と、持続可能な食料生産システムを確立しました。この事は2030年までに達成を目指す国際目標であるSDGsを達成出来た企業に進化した証です。